平成２３年１２月発行

パートナーシップおかや

ＮＯ．７

岡谷市男女共同参画推進市民の会

子どもたちが住みやすい未来に向けて

岡谷市企画政策部長　　小　口　明　則

私が企画課長そして企画政策部長として男女共同参画と直に関わりを持つようになってから、早５年が経とうとしております。

その間に、昨年度スタートしました男女共同参画社会づくりに取り組む上での指針となる「男女共同参画おかやプランⅣ」を策定し、その計画に基づき「岡谷市男女共同参画推進市民の会」の皆様との協働により、さまざまな事業を行ってまいりました。

その一つとして、１１月に開催された「男女共同参画おかや市民のつどい」での中学生の発表を聞き、社会での男女平等を実現するための課題を認識しつつ自分の将来を真剣に見つめ、自分の考えを自分の声で述べている姿に感心するとともに、頼もしく感じました。

若者の間では、「男女平等」の意識が根づいてきていると言えますが、一方で学校教育の場を出ると、「雇用の機会」「賃金」「昇格」「社会の慣習やしきたり」などさまざまな場面で、まだまだ平等とは言い難い現実に直面し、悩むこともあるのではないでしょうか。

性別にとらわれず、誰もが個性と能力を十分に発揮できる社会の実現に向けて若者たちが社会に出たときに、今感じている平等意識を持ちつつ、一人ひとりが考え行動することが重要になってくるのではないかと思います。そうした環境づくりに取り組んでいくことが求められています。

市民の会の皆様には、日頃から大変なご尽力をいただいているところですが、今後は更に、男女共同参画推進に積極的に関わっていなかった男性や若い世代の人たちを巻き込みながら、知恵と力を出し合い、男女共同参画社会の実現に向けて、活動の幅を広げることを期待したいと思います。

今後ともご理解ご協力の程よろしくお願いいたします。

小・中学生の男女共同参画への関わりますます盛んに

今年度募集した「男女共同参画社会づくり」ポスターの入賞者の表彰式が行われました。また応募作品すべてをイルフプラザのイベント広場に展示し、優秀作品は「おかや市民のつどい」でも公開しました。昨年の小学生の作文発表に続き、今年は中学生の意見発表もあり、子どもの頃からの「男女平等」意識「男女共同参画」の実践に期待すると共に一層大人の意識改革も求められます。

特集　男女共同参画　中学生の視点

男女共同参画「おかや市民のつどい」では昨年度市内の小学生から「マンガ冊子」を読んで思ったことを発表していただき、今年度は中学生の意見発表をお願いしました。遅々としている大人の意識に対して、子ども達の前向きな考え方に教えられるところが大きかったとの声が多く、再度振り返ってみたいと思います。

その１　男性・女性という差別意識がまだあるのではないか。

学校では、カバンの色や運動服にも男女別をつけていないが、慣用語の「主人」「家内」などは一家の中心は男家庭を守るのは女という固定的な意識を引き継いでいるのではないか。

― 確かに外国にはそれに当たる言葉がない。さて、何と言えばよいのだろうか。

その２　職業や役職にも男女の片寄りがあるのはおかしい。

保育士には男性が少ない。幼児にとっては男性の保育士も必要だ。一方、学校の校長や区長などに女性がとても少ない。子どもも地域の人々も男性女性同じくらいいるわけだから、片寄らない方が良いのではないか。

― どちらかに片寄ってしまったのはこれまでの社会状況によるのではないだろうか。現在の社会状況から未来に向けて改善する責任が大人たちにあると言えそう。日本の現状は世界的に見ても問題だ。

その３　家事を母親が一手に引き受けている現状を改善したい。

今は母親も働いている家庭が多いが父親も子どもも家事は母親に任せて当たり前と思っている。家族みんなが協力する必要があるのではないか。

― 男性は働くために、女性は家事をするために生まれて来たわけではない。身体的な特徴はあるにしても、男はこうあるべき、女はこうするべきというジェンダー意識はその人の生き方を拘束してしまう。お互いに生き甲斐のある人生を送るために、家族こそ尊重しあうべきではないだろうか。「お互い様」は家庭でも地域でも大切だ。

その４　女性として子育てと仕事のどちらを重要に考えたら良いか。

女性は子どもを生むことができる。男性にはできないことである。しかし自分のやりたい仕事もある。どちらを優先させたらよいだろうかと迷う。

― 戦の時代は、男は戦女は銃後の守りで家庭の切り盛りを一手に引き受けてきた。結婚すること、子どもを生むことは女性の勤めと言われていた。戦後復興のなかで女性も働き手となり、高度経済成長期は男性が家計を支え、再び女性が家庭を守るべく「専業主婦」と言う言葉も生まれた。その中で女性の不満やストレス働き過ぎる男性の問題が生じてきた

今、一人の働きで家計を支えられる男性がどれだけいるだろうか。それが出来ないから結婚に踏み切れない男性は多い。「一人では食べて行けなくても二人なら何とかできる」「不況で失職しても片方が働いていれば凌げる」。そんな時代の中で、「共働き」は今や常識。仕事をするならやり甲斐のある仕事につくべく努力したい。忙しい子育て期、親の介護も二人いれば乗り切れる。社会システムが以前とは変わってきているし、保育園や介護施設を利用することは、そこで働く人に仕事を与えることになる。それが循環型社会。みんなで働き、みんなで保険料や納税をしなければ社会福祉も破綻しそうな現在。みんなで考えなければならない問題ではないだろうか。

市民の会の活動から

山梨県への視察研修に参加して

笠原　邦子

去る10月３日に山梨県の「スペースふう」と男女共生センターを訪問させていただき、私は特にＮＰＯ法人「スペースふう」に興味を持ちました。経済産業省環境省等が関わっていると聞いて驚きました。全国にリユース食器が普及するのは遠くないと思います。岡谷市も考えなければならない課題だと思います。例えば、岡谷病院新築の折、厨房器具（洗浄器、食器、食器保管庫）等を更新するとしたら既存のものを利用し、空いている施設を使って市内のイベントにレンタルして市民の声を聞きながら前向きに考えても良いのではないでしょうか。

男女共同参画

「おかや市民のつどい」

去る11月19日に男女共同参画社会実現に向けて、岡谷市・おかや市民のつどい実行委員会主催で、市内の32団体の後援をいただき、約200 人の参加者を得て「おかや市民のつどい」が開催されました。

今年は市内４中学校から１名ずつの生徒が「男女共同参画」について意見発表がありました。「結婚しても仕事が続けられるだろうか」「保育士さんにもっと男性が増えればいいのに」「男女役割分担意識に疑問を持ち、ジェンダーについて勉強した」「どんな分野でも男女差別はあってはならない」など一人ひとりのしっかりした意思が込められていて、将来が期待できると多くの参会者が感心していました。

続いてこんのひとみさんのトーク＆ライブが行われ、登場人物を巧みに使い分けた絵本の朗読、先天性の病に苦しむ長男のために作った子守唄、参加者のメッセージに即興で曲をつけて歌うなど命の大切さ、親子の絆など男女共同参画の必要性をも交えながらのトークに多くの参加者から「来て良かった」という声が聞かれました。

若い人たちの参加がもう少し欲しかったところですが、各団体のリーダーの男性の姿も多く見られ関心を寄せて頂きました。

東堀区で開催
「男女共同参画社会づくり地域懇談会」

野溝　道子

「岡谷市男女共同参画推進市民の会」が女性の区会議員を増やしたいと活動し続けて10年近く過ぎました。岡谷市全体では最初の頃23人だったのが61人と増えたのです。女性の区会議員の居ないところは21区中４区だけとなり、その内の東堀区がアクションを起こしたのです。

11月29日夜７時から柴宮館で開催され70名近い参加者のうち男性が25名とよく参加していただいたと感心しました。

「市民の会」から４名の事例発表がありましたが、概要は次のようです。

① 区議会に女性が入っていないのはおかしいということで女性たちが行動を起こすことで道が開けた。

② 区条例を変えて議決機関と執行機関を別にすることによって、２名ずつの町内選出議員が現在男女同数になっている。また、若い人や女性が出やすいように議会は土曜の夜に開かれる。

③ 女性のものの見方は男性と違う面があり、介護や子育てなどの視点で考えられる。男女一緒に取り組めばよい地域づくりがでできる。

出席者から前向きな発言があり、女性区議の誕生が期待できる懇談会でした。

参加報告

日本女性会議2011　松江

今井区　伊藤　綾子

第28回女性会議は10月14．15日に開催され、岡谷市から６名が参加しました。予想はしていましたが「出雲の国」松江（島根県）はとても遠かった。

初日は分科会「女性の政治参画」に参加。企画運営すべて島根大学の学生が担い一年以上前から周到な準備と研究がなされたことでしょう。てきぱきとした意見発表と会の進行に清々しさと信頼感が持てました。「男女共同参画活動」「女性議員は増えた方がよいか」「若者に何を求めるか」などについて議論し、学生に対して参加者から親への甘え、投票率の低さなどの苦言に対して、そのように育てた親にも責任があると結局は自分たちも反省する羽目になりました。

二日目は基調報告として内閣府の岡島敦子男女共同参画局長より、第３次男女共同参画基本計画を一人ひとりが自らの課題と認識し、強力に進めたいと訴えました。また、基調講演として登山家の田部井淳子さんより、目指す山は「どうしても登りたい」という意思があれば実現する。ピンチの時、機転のきく人が必要で、一生懸命物事に取り組んでいる姿を見せれば家族も周囲も協力してくれる。登山という常に生死をかけた厳しい生き方をしておられる田部井さんのお話には説得力があり、感銘深いものでした。

《お知らせ》

岡谷市「男女共同参画フォーラム」を１月１９日にカノラホールで開催します

岡谷市と市民の会、女性団体連絡協議会との共催で、加藤副知事の講演および懇談を計画しています。ネットワーク化をめざし、他団体へも呼びかけて行います。

男女共同参画フェスティバルｉｎしおじり

三沢区　山崎　一子

「ともに輝く女と男」をテーマに10月22日に開催されました。

パネルディスカッションでは、テーマは「ともにつくる地域づくり」で、パネラーは NPO法人森倶楽部21の平島副理事長、塩尻東公民館きらめき教室受講生の丸山さん、松本市寿台公民館長の吉村さん、コーデイネーターは長野大学の古田教授、アドバイザーとして加藤副知事も参加されました。その中で地域の課題は何か、問題をはっきりさせる。行事等への参加を通し互いを知りとことん話し合う。また、時の流れの中から新しい視点の考えを持つ、推進に当たっては行政と一体化して取り組むとか位置づけに女性を据えるのも一つの方法等たくさんの話題に興味と関心をもちました。男女共同参画の推進で地域が活性化される事を願いました。

講演は菊地幸夫弁護士で、「仕事も家庭も一生懸命～出会いの人生から学んだこと」と題して話す・聞く力を磨くことの大切さ、判断する訓練、人前で考えを述べられる人でありたい。そのことが男女共同参画の社会が生まれると身近なことと関連させて話されました。

あいとぴあ祭りでワークショップ

12月10日（土）行われた“あいとぴあ祭り”で、市民の会でもワークショップ「昔からの慣習としきたり、これでいいの！」を開きました。関心のある人たちから積極的な意見が交わされ、意義深い時間が持てました。